

[ 報告・研究ノート ]

## 教会を造り上げる

—— I コリント書 14 章を読む ——

吉田 新

はじめに

「あなたがたは集まったとき、それぞれ詩編の歌をうたい、教え、啓示を語り、異言を語り、それを解釈するのですが、すべてはあなたがたを造り上げるためにすべきです。」  
(I コリ 14: 26)

I コリント書 14 章では、パウロは彼の論敵を念頭に起きつつ、霊の賜物たる預言と異言の意義について詳細な説明を加えている。その際、パウロは教えや預言、異言は人、そして教会 (ἐκκλησία) を「造り上げること、建てること (οἰκοδομή)」であると説いている。教会とは何か、という問いを正面から論じた I コリント書において、何度も用いられるこの単語は、パウロの教会論を理解する核となる重要な語句だと思われる。

本稿では、この言葉を中心にパウロの教会形成の真意を確認したい。コリント教会の預言、異言の役割を見極めつつ、今日の教会における説教の意義について考えたい。

### 1 I コリント書 14 章における預言と異言

本書簡の宛先であるコリント教会は、パウロが第二回伝道旅行の際に建てた教会といわれている (使徒 18: 1-8 参照)。I コリント書は彼の第三回伝道旅行の間、エフェソ滞在中 (紀元後 53-55 年頃) に執筆された (1 コリ 16: 8 参照)。冒頭の宛名に記されているように、「コリントにある神の教会」(1: 2) に送られたこの書簡の中心的テーマは、教会論である。書簡を通して、争いがあるコリント教会 (1: 10 以下) の諸問題に関してパウロの回答を提示している。それらはいずれも、冒頭に「～について (Περὶ δέ)」という導入句を用いて始められている (7: 1, 25, 8: 1, 4, 12: 1, 16: 1, 12)。パウロはこの書簡によって、彼がコリントを離れた後に教会内に入ってきた論敵たちによってもたらされた混乱を沈静化させ、教会の一致を促している。

I コリント書 14 章 1 節以下は、12 章 1 節から語られる「霊の賜物について (Περὶ δὲ τῶν πνευματικῶν)」の枠内に位置し、最も大きな霊の賜物である愛について語られた後 (12: 31-13: 13)、それと対する形で別の霊の賜物である預言と異言について語られる<sup>1</sup>。ここでパウロは、教会で語られる異言を預言と対比しつつ、前者に対する後者の優位を主張する。おそらく、霊の賜物としての異言を重んじるコリント教会内の敵対者を意識した発言であろうが<sup>2</sup>、預言と異言に関する言及は彼の教会論の一環として論じられる。以下、I コリント書 14 章でパウロが論じる預言と異言の相違を一覧にする。

	預言	異言
語る対象	人に向かって語る (14: 3) 人に対して建設的なこと (人を造り上げること)、勧めと励ましを語る	神に向かって語る (14: 2) 霊に対して神秘を語る 祈り (14: 13) であり感謝 (14: 16)
造り上げる対象	教会を造り上げる (建てる) (14: 4)	人を造り上げる (建てる) (14: 4)
解釈	解釈は不要 (14: 5)、ただし他の者が判断する (14: 29)	解釈は必要 (14: 5, 27)
理性	言及なし	理性で語らない (14: 14)
しるし	信じる者 (信者) にとってしるし (14: 22)	信じていない者 (非信者) にとってしるし (14: 22)

パウロは預言の優位性を強調し、信者ではない者が異言を聞いた場合、気が狂っていると思われるしまうと説く (14: 23)。それに対して預言を聞いた者は批判され、彼の心の内に秘められたもの (τὰ κρυπτὰ τῆς καρδίας αὐτοῦ) が明らかにされ、神を拜む<sup>3</sup> (14: 25)。このように断言したパウロは、26 節で先のように助言する。教え、預言の啓示、異言もすべてを造り上げるため (建設のため) に行うべきである。異言を語る場合も解釈をさせ、解釈を伴わない異言は教会を造り上げるものにならないので、黙って、一人で神と対話せよと述べる (14: 28)。そして、最後に預言も異言も適切に、秩序正しくされるべきであると説かれる (14: 40)。

異言はたとえそれが神に向かって語られているとはいえ、自己完結的なモノローグに過

<sup>1</sup> 初代キリスト教会において、旧約や初期ユダヤ教の文献に記された預言者とは別な預言者の姿が見出される。コリント書に記されているような教会に定着した預言者だけでなく、各地を放浪する預言者の姿も記されている (使徒 11: 27 以下, 21: 10, デイダケー 13: 1 以下)。

<sup>2</sup> 青野太潮『最初期キリスト教思想の軌跡 イエス・パウロ・その後』, 新教出版社, 2013 年, 508 頁参照。

<sup>3</sup> 同様の発言は以下を参照。I コリ 4: 5 「主は闇の中に隠されている秘密 (τὰ κρυπτὰ τοῦ σκότους) を明るみに出す」, ロマ 8: 27 「人の心を見抜く方は、霊の思いが何であるかを知っている」。また、パウロは他の書簡でも預言を重んじる発言を残している (I テサ 5: 20 他)。

ぎない。教会で語られるべきは他者に向かうダイアログである。このように、モノログの異言が厳しく退けられるのは、それぞれの霊の賜物は、共同体である教会を建設する役割があるからに他ならない。とりわけ、教会の基盤が揺らいでいるコリント教会において、この点を確認する必要がパウロにはあった<sup>4</sup>。Iコリント書14章以下は、預言と異言についての提言だけではなく、それらが教会の中でどのような関係を持っているかを説いた教会論が軸となって展開している<sup>5</sup>。

Iコリ14章6節、及び26節でも預言と異言と共に言及されている「教え (διδασχία)」とは何か<sup>6</sup>。初代教会の礼拝では、「教師 (διδάσκαλος)」(Iコリ12:28, ガラ6:6, ロマ12:7) と呼ばれる人物らが「キリストの言葉」(コロ3:16) を伝え、または聖書を朗読、解説していたと考えられる<sup>7</sup>。教師は使徒、預言者に並んで初代教会で重要な役割に担っていたようである。次に教会を造り上げ、建設するという言葉にはどのような真意が隠されているのかを確かめる。

## 2 人と教会を造り上げること

パウロにとって教会は、「イエス・キリストにおける信仰を通した」(διὰ τῆς πίστεως ἐν Χριστῷ Ἰησοῦ) (ガラ3:26) 神の子の集いであり、彼、彼女らは「キリストの体 (σῶμα τοῦ Χριστοῦ)」(ロマ7:4, Iコリ6:15, 10:16, 12:12 以下他) に連なっている。とりわけ、Iコリント書の前半部分において、パウロはコリント教会の構成員は「神の畑」であり、「神の建物 (οἰκοδομή)」であることを述べる (Iコリ3:9)。「イエス・キリストという既に据えられている土台を無視して、だれもほかの土台を据えることはできません。」(3:10) イエス・キリストが土台 (θεμέλιος) であるというメタファーを用いて教会について語っている (同3:10-11, ロマ15:20 参照)。この建築物の礎としてのイエス・キリストのメタファーは、同書14章以降でも用いられている同様の建築用語「造り上げること、建てること (οἰκοδομή)」に繋がっていく<sup>8</sup>。14章1節以下は3章1-17節と密接に関

<sup>4</sup> 「教会 (ἐκκλησία)」という単語は新約では114回用いられているが、そのうちパウロ書簡は44回、I, IIコリでは31回に及ぶ (Iコリは19回)。

<sup>5</sup> Vgl. C. Wolff, *Der erste Brief des Paulus an die Korinther*, Leipzig 1996, S. 328. Iコリント書で教会に関する言及は14章に集中している。14:19, 23, 26, 28, 33, 35。

<sup>6</sup> ロマ6:17. 16:17 参照。

<sup>7</sup> 山田耕太『新約聖書の礼拝 シナゴークから教会へ』日本キリスト教団出版局, 2008年, 47-56頁参照。エフェ4:11, 使13:1, ヤコ3:1, デイダケー11-15参照。

<sup>8</sup> Lindemann は、様々な問題を論じているIコリント書の中心テーマは「教会 (ἐκκλησία)」とそれを「造り上げること (οἰκοδομή)」に集約されると主張している。A. Lindemann, *Der erste Korinther-*

係している。パウロはIコリント書14章で4回「οικοδομή」, IIコリでも4回用いており、教会形成に関する文脈でこの言葉を好んで使ったと考えられる<sup>9</sup>。

- 14: 3 「預言する者は、人に向かって語っているのだから、人を造り上げ、励まし、慰めませよ (οικοδομήν καὶ παράκλησιν καὶ παραμυθίαν)。」
- 14: 5 「(略) 異言を語る者がそれを解釈するのでなければ、教会を造り上げるためには (ἵνα ἡ ἐκκλησία οἰκοδομήν λάβῃ), 預言する者の方がまさっています。」
- 14: 12 「あなたがたの場合も同じで、靈的な賜物を熱心に求めているのですから、教会を造り上げるために (πρὸς τὴν οἰκοδομήν τῆς ἐκκλησίας), それをますます豊かに受けるように求めなさい。」
- 14: 26 「(略) あなたがたは集まったとき、それぞれ詩編の歌をうたい、教え、啓示を語り、異言を語り、それを解釈するのですが、すべてはあなたがたを造り上げるためにすべきです (πάντα πρὸς οἰκοδομήν γινέσθω)。」

名詞「οικοδομή」は、家(οἶκος)を建てることに由来し、「(家などの構造物)を建てること」「造り上げること」、「建築」のみならず、靈的に「人を建てる」「造り上げる」という意味も含んでいる。動詞「οικοδομέω」もIコリント書では6回用いられる(8: 1, 10, 10: 23, 14: 3-17)<sup>10</sup>。ここでパウロはおそらく、具体的な建築物を意味せずに、教会を形成する人を造るという抽象的な意味としてこの動詞を使用している。教会は具体的な建物であるより、イエス・キリストが土台として基礎づけられ(3: 9)、靈の賜物を持ち寄りつつ、互いに造り上げ、建て合うイメージをパウロは持っていたようである。このパウロの言葉から、当時の建築資材である石材をひとつひとつ積み上げていくようなイメージが読み手に立ち上ってくる。

Iコリント書12章で、教会に属する一人一人が「キリストの体」に結ばれ、互いに補い合うことを強く訴える。それぞれの靈が「全体の益」(12: 7)になるためである。このことを確認し、それぞれの賜物を携え、主体的に参加するのが礼拝であった(14: 26)。まさに礼拝は、「οικοδομή」を確かめ合う場である<sup>11</sup>。そして、「愛が人を造り上げる(ἡ

brief, Tübingen 2000, 15-17.

<sup>9</sup> その他、ロマ14: 19, 15: 2, Iコリ3: 9, IIコリ5: 1, 10: 8, 12: 19, 13: 10,

<sup>10</sup> その他、パウロ書簡ではロマ15: 20, ガラ2: 18, Iテサ5: 11。さらに「上に建てる、建て上げる(ἐποικοδομέω)」は、Iコリで4回使用されている(3: 10, 12, 14)。

<sup>11</sup> 同様の主張が以下の書で見出される。「礼拝はοικοδομήを現実のものとする場である。つまり、

ἀγάπη οἰκοδομεῖ)」(8: 1) ことを認め合う場でもある<sup>12</sup>。Choi によれば「οἰκοδομή」を実現する礼拝を守るために、パウロは二つのことを要求している<sup>13</sup>。第一は礼拝において秩序を重んじること(14: 33, 40)、第二は参加者全ての者に理解できるもののあることである(14: 27 以下)。それゆえ、モノゴールではなくダイアログとして、互いが互いを造り上げることが求められている。一つ一つの石材として霊の賜物が重なり合って家(教会)を築き、その土台はイエス・キリストが支えている。パウロは分裂の危機に瀕するコリント教会に対して、以上のようなイメージ豊かな提言を書簡として送ったのである<sup>14</sup>。

## まとめ

最後に、これまでの積義的考察を踏まえ、今日の教会における説教の意義について考えたい。もちろん、パウロはIコリント書14章で説教そのものについて意見を述べたわけではないが、14章の論述から説教のあり方を学ぶことができると考える。以下のようにまとめられる。まず、預言と異言の相違から分かることは、教会で語るべきことはダイアログであり、人に向かって語るべきである。時にそれは人の内に秘めたる事柄をあぶり出す批判性を携えている。そして、それは人を造り上げだけではなく、教会を造り上げる目的を担っている。説教は自己完結的なモノログになってはいけない。今日の教会の説教者が念頭に置くべきことを、パウロが残した言葉から学ぶことができるだろう。

---

教会(Gemeinde)のοἰκοδομηは礼拝の出来事を通して生じるといえる。」Vgl. S. B. Choi, Geist und christliche Existenz: Das Glossolalieverständnis des Paulus im Ersten Korintherbrief (1Kor 14), Neukirchen-Vluyn 2007, 161.

<sup>12</sup> Vgl. M.V. Lee, Paul, the Stoics, and the body of Christ, Cambridge 2006, p. 193.

<sup>13</sup> Vgl. S. B. Choi, Geist und christliche Existenz, 163.

<sup>14</sup> このようなパウロの提言がコリント教会で必ずしも好意的に受け止められなかったことは、IIコリント書に記された次のパウロの言葉から明らかである。「あなたがたを打ち倒すため(εις καθαίρειν)ではなく、造り上げるため(εις οἰκοδομήν)に主がわたしたちに授けてくださった権威について、わたしがいささか誇りすぎたとしても、恥にはならないでしょう。」(IIコリ10: 8)、「壊すため(εις καθαίρειν)ではなく造り上げるため(εις οἰκοδομήν)に主がお与えくださった権威によって、厳しい態度をとらなくても済むようにするためです。」(同13: 10)